



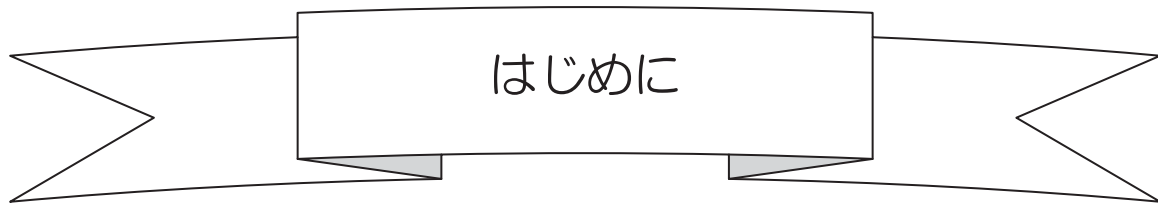
子どもたちへのメッセージ集 2010

～ 命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ ～



命を守ること、そして協力して
自分たちにできることをしましょう。





へいせい ねん がつ にち はんしん あわじ だいしんさい
平成7年1月17日、阪神・淡路大震災があり、

おお かた な いえ うしな
多くの方が亡くなり、家を失いました。

だいさいがい けいけん かた いのち たいせつ
その大災害を経験された方たちから、命の大切さ

しんさい まな こ つた
や震災から学んだことを子どもたちに伝えるために

よ の
寄せられたメッセージを載せています。

よ
みなさん、ぜひ読んでみてください。

子どもたちへのメッセージ集 2010

～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

も く じ

- ☒ 子どもたちへのメッセージ (21通)
 - 震災当時の様子 1ページ
 - 自然の怖さ 4ページ
 - 生きる大切さ 6ページ
 - 感謝の気持ち (助け合い) 13ページ
 - 地震への備え 22ページ
- ※ 内容によってテーマ分類しています。
- ※ 経験や想いを尊重してお伝えするため、誤字・脱字を除き、メッセージを原文どおり掲載しています。
- ☒ 絵手紙 (大震災からまる15年) 24ページ
- ☒ 書道作品 (負けない逃げない諦めない...) 25ページ
- ☒ 消防隊員の震災手記 26ページ
- ☒ メ モ 34ページ
- ☒ 子どもたちからの感想文 (一部抜粋含む10通) .. 35ページ
- ☒ しあわせ運べるように 38ページ
- ☒ さいごに / 子どもたちへのメッセージ運動の概要 .. 39ページ
- ☒ 阪神・淡路大震災関連資料 40ページ

※ 阪神・淡路大震災関連資料は、「震災10年～神戸の記録～」(平成16年10月

神戸市広報課発行)と「阪神・淡路大震災被災状況及び復興への取り組み状況」

(平成22年1月1日現在)によるものです。

● 子どもたちへ

お母さんが震災を体験したのは20才の時でした。寝ていると「ゴーゴー・・・」とすごく大きな音が聞こえ家がゆれました。お母さんはすごく大きなトラックが家につっこんできたと思いました。とても長く大きなゆれに、地震だとわかりました。布団にはタンスやタンスの中身がふってきて、すごく苦しくなりました。外では火事がおき、近くの商店街はたくさんのお店やお家が焼けてしまいました。消防車も他にたくさん燃えている所があったので来てくれません。みんなでバケツの水をくんで火を消そうとしましたが間に合いませんでした。死んでしまった人もいました。とても苦しく、かなしい気持ちになりました。

そのうち水もガスも電気も止まってしまいました。今まで当たり前前に蛇口をひねれば水が出て、ボタンを押せば電気がつき料理も出来ていたのが、急にできなくなったのです。本当に本当に困ってしまいました。そこから家族や近所やまわりの人たちとの助け合いが始まりました。知らない人達が、ボランティアであたたかい食べ物を配りに来てくれたりもしました。今まであいさつもしたことのない近所の人と、色々な物を分け合い助け合うことをしました。お母さんは、その時に改めて人と人とのつながりの大切さを、優しさを知ったように思いました。きっとそう感じた人はたくさんいると思います。

20才の時のお母さんは、お化粧する事や、きれいな服を着ることが大好きでした。でも地震が起きたあの日から、しばらくの間はそんな事を気にすることはなくなってしまいました。なぜかというと、生きるために必死だからです。バケツの底にたまっている少しの水が大切に感じた気持ちや、お茶わんに残ったごはん一粒一粒が大切に感じた気持ち・・・震災を体験したお父さんやお母さんも忘れられないようにしたいと思います。

● 子どもたちへ

1995年1月17日朝、ドンという突き上げるような震動を感じ、ゴーという地鳴りと共に地球の底へ引き込まれるような、なんともいえない地ゴクの中に入っていくような感じを私は感じました。当時息子達二人定時制へ行っていました。兄は4年でやっと2月卒業前でした。

私たち夫婦は1階で寝てましたので、2階部分が頭すれすれという状態、不思議と無傷、主人と2人で抱き合っって揺れが止まるのをまっていた。息子たちが2階からだいじょうぶかと叫んでいました。私もだいじょうぶと息子に声をかけ、床を素手ではがしてくれ血を流しながら助けてくれました。

2階の明るいところに出てはじめて、周りが破壊されているその光景を見て、ひょっとしたら天地が滅びたんとちがうかと思いました。我をとりもどし、皆で近所の方々、子供やお年寄りの生き埋めになった人々を助け、そこらへんの近所の人を助けられました。

しかし裏の2人の高校生の息子さんは亡くなり、毛布にくるまれて物体のようになっているのを見て、ほんとうに人間の死はむなしい、そう感じました。

今2人の内の息子は元気で働いています。ほんとうに15年間今日まで守られたこと感謝します。



平成22年1月18日

土井 洋子

震災当時の様子

● 子どもたちへ

平成7年1月17日、神戸を襲った大きな地震は、一瞬にして多くの人の命を奪い、昨日までの街の景色を一変させました。

私は地震発生から30分後には、当時勤務していた会社がある須磨区におり、会社の周りの倒壊した家の下敷きになった人を救出する為、周囲の方々と協力して瓦をとり、柱や壁をのけ、時々声をかけながら助け出そうと皆必死でした。

救急車や消防車、パトカーも足りず助かった住民が協力しなければ、家の下敷きになった人達を救出する方法はありませんでした。何時間もかけ助け出した時には、もう息をしていない方も何名かいましたが、中には、こちらの呼びかけに返答出来る人を救助した時は、自然と笑みと歓声がおこり、中には涙を流す人も数名いらっしゃいました。今まで、会話どころか、顔も見事もない人達にもかかわらずです。

そのうち、おにぎりを持ってくる人、水や飲み物を持ってくる人、毛布や布団を持ってくる人、ケガをして動けない人を背負って避難所まで運ぶ人など、多勢の人達がお互い助け合いながら一生懸命、命をつなぎ、乗り越えようとしていた光景は、今でもハッキリと覚えています。

『困っている人がいたら、すすんで手を差し伸べる』

自分も含め、子供達にも、こういった事が出来る人間に育ってほしいと思います。

平成22年1月4日

● 子どもたちへ

1月17日、震災の日が来る度に、あの日 早朝 ジェットコースターのよ
うな揺れから始まった 悪夢のような一日が、ひとつひとつ 未だ、手に取る
ようによみがえってきます。

傷ひとつなく、パパとママは助かりました。

外へ出ると、まわりの家は、みなペッシャンコで、白い土煙がもうもうと
していました。

そこへ火の手（火事）も迫って来ました。

がれきの中から赤ちゃんが運び出されました。

その子のお母さんが赤ちゃんにしがみついて泣き叫んでいました。

でも赤ちゃんは泣いていませんでした。

まっ白な顔でした。

あれから15年・・・

もしママがあのお母さんだったら、どうやってあの深い深い悲しみを
乗り越えただろう。

地蔵盆の度にあの光景が思い出され

心の中でそっと手を合わせます。

あの時は寄り添えなくてごめんなさい。と



平成22年1月20日

西邑 純子

■ 自然の怖さ

● 子どもたちへ

わたし はんしん あわじだいしんさい とき すいたし えさかきんべん わたし いえ
私は阪神・淡路大震災があった時、吹田市の江坂近辺にいました。私の家も
ていでん ほん しょつき ひら しょつき
停電し、本だながたおれ、食器だなのとびらが開いて、食器をたくさんわりま
した。近所では屋根がわらがずり落ちたり、塀のブロックが倒れたりしました。

しんさい ねんまえ なつ じつ わたし ほっかいどう ほこだて ほっかいどうなんせいおきじしん
震災の2年前の夏に、実は私は北海道の函館で、北海道南西沖地震にあった
ばかりだったので、ラジオを枕元に置いて、地震があった時、北海道の地震を
おも だ あたま もの お おも よこ ね ちち はは
思い出して、まず頭に物が落ちてきたらいけないと思い、横に寝ていた父と母
に「頭に布団をかぶって！」と言ったことを思い出します。

よく地震がおきたら「すぐに家から外へ飛び出すように」と言うことが一般的な
ので、私の判断は下手したら命とりになっていて、間違った判断だったので
はと思いますが、大阪の吹田でも結構の揺れだったので、しかも朝早くみんな寝
ていて、寝起きの状態だったので、正しい判断が出来なかったように思います。

ましてや、神戸、宝塚、淡路島のようにとても大きな揺れだった所で、し
かも私みたいに最近まで大きな地震にあったことのなかった人々にとって、本
とう
当にパニックになってどうしていいかわからず、亡くなった方もきっとたくさ
んいらしたことでしょう。

はんしん あわじだいしんさい ほっかいどうなんせいおきじしん とき おくしりとう つなみ
阪神・淡路大震災だけでなく、北海道南西沖地震の時、奥尻島で津波にのみ
こまれた人々のことも忘れないでほしいです。その地震があってから、地震が
あるたび、「津波の心配はありません」とテレビの字幕に出るとはありますが、
はいご ほっかいどうなんせいおきじしん つなみ はんしん あわじだいしんさいほどおお
その背後には北海道南西沖地震で津波にのみこまれた、阪神・淡路大震災程多
くの人ではないにしても、かずすく きちよう な ひとびと いのち わす
くの人ではないにしても、数少ない貴重な亡くなった人々の命があることも忘
れないでほしいです。

2010年1月19日

松田 康志

● 子どもたちへ

こんにちは。阪神・淡路大震災があったあの日、初めて気づいたのは、それは「いつもの毎日が、こんなにも幸せだったんだ。」ということでした。「幸せって、なるものではなく、なくなってから気がつくものなんだな。」って感じました。

たくさんの人たちが亡くなって、電気、ガス、水道がとまって、ひきつづいて起こる小さな地震の中、ひびのはいった家で家族とおびえていました。

被害のかるい西区でも、こんなようすでした。

だからね。みんなは今のこの毎日を「幸せだな〜。」って思いきり感じて、1日1日を大切にすごしてくださいね。

そして、人を愛するうれしさや、人から愛されるうれしさを知って、震災で亡くなったたくさんの人たちのぶんまで、生きるよろこび、生きているよろこびをしっかりとかみしめてくださいね。

じゃあ、またね。



平成22年1月17日

小田 隆司

● 子どもたちへ

平成7年1月17日、私は兵庫区水木通の自宅マンションで震災に遇いました。ダンス、本棚、テレビ等は倒れ、家の中はすごい状態でした。

私のお腹の中には、出産予定日を過ぎた赤ちゃんがいましたが、沢山の良い偶然が重なり、私もお腹の中の赤ちゃんも怪我をせず無事でした。そして1月21日に中央区の病院で男の子を出産しました。病院も被害を受けていたので、暖房も水もなく、大変な環境での出産でした。

神戸の町はボロボロになり、沢山の命が失われた時だったので、家族、親戚はもちろんのこと、大勢の人が新しい命の誕生を喜んでくれました。多くの人に支えられ、震災の中で無事出産できたこと、そして喜んでくれたことに本当に感謝しました。

私の知人も震災で数人亡くなりました。その中に小学校6年生の子どももいます。平成7年のお正月には「もうすぐ中学生です。頑張ります。」と年賀状を送ってきました。色々な希望、夢があったことでしょう……。

「命」があれば夢もかないます。感動もできます。

震災の時は「生きている」ということに心から感謝しました。

皆さん、今自分が「生きている」ということが当たり前だと思っているでしょう。それは、すごい事なんです。皆さんが生きていくには、沢山の人が見守り、喜び、力を貸して下さいます。

いつも必ず誰かが見守っているからね。

平成22年1月2日

H・Y

● 子どもたちへ

はんしん あわじだいしんさい
阪神・淡路大震災より15年目の今年。震災の年に生まれた子どもたちは、
こうこう ねんせい ちゅうがく ねんせい ははおや なか なか こ しんさいご
高校1年生、中学3年生となり、母親のお腹の中にいた子どもたち、震災後に
う 生まれた子どもたちは ちゅうがく ねんせい ねんせい
生まれた子どもたちは中学2年生、1年生となります。

こうべ だいしんさい けいけん しんさいご せいかつ ささ す いま
この神戸で大震災を経験し、震災後の生活をみんなで支えあい過ごし今が
あります。ガス、水道、電気とライフラインが途絶え、交通網が整備されない
なか ふじゆう せいかつ
中での不自由な生活。

そのような中 子どもたちを育てるために一生懸命だった親たち。そして児
どう せいと ぶじ ねが いちにち はや がっこう さいかい どりよく くだ
童、生徒たちの無事を願い、一日も早く学校を再開しようと努力して下さった
せんせい がっこうかんけいしゃ かたがた
先生、学校関係者の方々。

ぶじ う いのち かな つら ざんねん な いのち
無事に生まれた命、とても悲しく辛く残念ですが亡くした命があります。
しんさい とき ちゅうがく ねんせい せんせい おな がっこう ちゅうがくせい な いま
震災の時に中学2年生だった先生が、同じ学校の中学生が亡くなり、今で
も“しあわせ運べるように”を聴くたびに、おもい起こし涙が出る、と・・・
はな
話されていました。

「おもい起こす」ということは、『おもいやる』ことにつながると聞いた
ことがあります。

どうぞ、震災があったことを「おもい起こし」、『おもいやる』心を、『命』
を尊ぶ心を育てていって下さい。

平成22年1月15日

願文

● 子どもたちへ

わたし しんさいとうじしょうがく ねんせい こうべしひょうごく す
 私は震災当時小学1年生で神戸市兵庫区に住んでいました。2つ下の弟
 はは にん いっしょ へや ね
 と母と3人で一緒に部屋に寝ていました。その日いつもと変わらずに私はすや
 すやと寝ていました。すると突然、大きな揺れがきて目を覚ましました。とっ
 さに母は幼い弟におおいかぶさったそうですが、私は体も小さかったので
 みぎ ひだり ふとん うえ ころ
 右へ左へと布団の上を転がっていました。

なに お 起こっているのかわかりませんでした。とにかく怖かったです。すぐ
 となり ね ちち わたし ちち へや で ふ む
 隣で寝ていた父がかけつけ、私は父にしがみついて部屋を出ました。振り向く
 と、ついさっきまで私が寝ていたまくらに、たな かざ いた おお どうぞう お
 いて、まくらがやぶれているのがわかりました。もしそこに私が寝ていたら・・・
 おも
 と思うとぞっとしてなりません。

おお ゆ 大きな揺れがおさまってから、よしん なんにち つづ わたし まいばん
 大きな揺れがおさまってから、余震が何日も続き、私たちは毎晩、くつを
 はいたまま寝ました。ちち はは またいつ大きな揺れがくるかわからないので、
 こうたい ね
 交代しながら寝ていたそうです。

さいわ 幸いなことに、わたし しんるい な なた かた ともだち かぞく
 幸いなことに、私の親類では亡くなった方はいませんでした。友達の家族が
 な なくなったり、おな しょうがっこう なかま な じしん やく にんいじょう
 なくなったり、同じ小学校の仲間が亡くなりました。この地震で約6,400人以上
 かた とつぜんいのち うば とうじ さい わたし いのち たいせつ
 の方が、突然命を奪われたのです。当時6才だった私には、命の大切さ、は
 かなさ、そういったことをちゃんと理解できていなかったけれど、じしん けいけん
 地震を経験し、
 いまい きせき 今生きているということがいかに奇跡で、いかにありがたいことなのかを思う
 なにげ になにげ 1日 たいせつ かん
 と、何気ないありふれた1日がとてつもなく大切に感じます。

だから、みな し 命はたった1つです。いのち いのち
 生きていくことがどんなに素晴らしいことなのか。どうか命を大切にしてください。

もしあなたが、死んでしまいたいと思う位、辛いことがあっても、物事は良
くも悪くもずっとは続きません。生きてさえいれば、必ず笑える日が来る。
地震を通して、命の大切さを今いちど考えてみてほしいと思います。

2010年3月8日

雲田 智子



生きる大切さ

● 子どもたちへ

～わすれてはいけません～

はんしん あわじだいしんさい
阪神・淡路大震災から15年が経ちました。

でもわすれてしまっはいけません。

たいせつ ひと な
大切な人を亡くしてしまった人は、ずっとつらいということ。

かな き
悲しみは消えることがないこと。

おも で ふか いえ うしな にど
思い出の深い家やものを失い、二度ともどおりにはないこと。

ずっとこうべにすんでいたはずなのに、ほかのところうつす
ずっと神戸に住んでいたはずなのに、ほかの所に移り住んだまま、

かえ
帰りたくても帰れない方々がたくさんおられるということ。

いのち たす
命は助かったけれど、いっしょうのこ
一生残るきずや、こういしょうのこ
後遺症が残った人々が

おられるということ。

まち ひと げんき
街や人は元気になったように見えるけれど、しんさい まえ あと
震災の前と後とでは、じんせい
わってしまった人が、たくさんたくさんいるのです。

そのことをいつもおぼえておいてください。



2010年1月30日

松本 聡子

● 子どもたちへ

まいにち あさお よるね あさ ふつう じかん たいせつ こと
 毎日、朝起きて夜寝てまた朝がきてと、普通の時間がとても大切な事で、あ
 りがたい事と感謝している人が何人いるのかな？

とき
 あの時にはもどりにたくないけれど、忘れない様にする事は、とても大切
 な事だと感じています。

ひ ぜんじつ こ はなし ひと
 あの日の前日あそんだ子、お話した人がいなくなるさみしさ、すごくショッ
 クでしたが、時間がたつにつれて悲しくなりました。その時は自分の事が精一杯
 で、近所の人々の命までなかなか考える余裕はありませんでした。

とく でんき つか しよう ぶん ひがい おお
 特にTVなど電気を使うものが使用できない分、被害の大きさをすぐにわか
 らなかったのも、今になって思えば幸せな事だったと思います。きっとすぐに
 知っていたら、絶望感で動く事すら出来なかったと思います。

あさ てもと こども がっこう あそ い とき かんが
 朝だったから、手元に子供がいたけれど、学校や遊びに行っている時と考
 るとすごくこわいです。けれど、もしもばかり心配してたら楽しくありません。
 いま せいいつぱいの いま とつぜん こうかい じぶん い こと
 今を精一杯楽しく、今が突然きても後悔しないよう、自分らしく生きていく事、
 まいにち ふつう かんしゃ こと わす じんせい おく おも みな
 毎日の普通に感謝する事を忘れずに人生を送りたいと思うし、皆がそうであ
 ってほしいと願っています。

せんそう たいけん ひとたち せんそう こわ い
 戦争を体験した人達が、戦争よりも恐かったと云われてました。

せんそう こわ さいがい い
 戦争より恐い災害にまけずに!!とも云われました。

いま く こと よう ねが なにごと ね
 今が来る事がない様に願いつつ、また何事もなくあたたかいおふとんで寝ら
 れる事に感謝したいと思います。すべての事にありがとう。

2009年11月24日

おかあさん

子どもたちへ

あの日がくると知っていたら
あの地震が起きると知っていたら
大好き
ありがとう
ごめんなさい
意地を張らずに言えたのに
毎日感謝を伝えたのに

一緒に暮らしていると あまりに身近すぎると
いつでも言えるから いつでも良いと思っていた
でもあの日を過ぎて おばあちゃんに「明日」は来なかった

15年も経ったのに 言えなかったたくさんの言葉が
雪のように心に降り積もってまだ溶けないでいる

だから
照れ臭くても 喧嘩してても 一緒でも 遠くにいても
相手にきちんと伝えて欲しい
大好き ありがとう ごめんなさい の言葉を
大切な人に伝えて欲しい
大切な人に 必ず「明日」が来るとは限らないのだから
あの日 地震で亡くなっていった多くの人に
伝えられなかった思いの分まで

平成22年 / 月 / 日

お名前：

まゆまゆ

より

● 子どもたちへ

震災は突然やってきました。大自然の前で、人間は何もなすすべがありませんでした。ですが、地震がすぎ去った後の神戸の人達は、お互いを助け合いました。

助け合いの気持ちは、人間がもともと持って生まれたものです。それが地震のときに、大きく、広がっていったのです。

では、地震がおこらなかったら、助け合いの気持ちはわき起こらなかったのでしょうか？ いいえ、そうではありません。

普段の生活から、私達はもっと、周りの人達と助け合って生きていけるはずです。助け合いの気持ちは「愛」と「感謝」から生まれます。

お父さんやお母さんに親孝行していますか？

学校の先生のお話を真剣に聞いて勉強していますか？

友達の中でいじめられている人がいても、知らん顔したり、無視したりしていませんか？

電車で、お年寄りに席をゆずっていますか？

駅前の点字ブロックの上に、自転車を違法に止めていませんか？

愛と感謝の気持ちで毎日を生きましよう。

大人もその気持ちを忘れず生きていきます。

2010年1月21日

林 りえ

● 子どもたちへ

震災からまもなく、避難所になっている学校へボランティアに行きました。
～私の住んでいるアパートは、食器も電気器具もほとんどがこわれてしまい、
ガスも2月いっぱい止まってしまいましたが、住まいは無事でした～
救援物資の仕分けをしたのですが、その時、中国や台湾、韓国、そしてそ
の他のアジアの国々からも、Tシャツやタオル、歯磨きなどが送られてきてい
るのに気づき、胸がいっぱいになりました。当時、日本ほど豊かでないと思わ
れていた国々の人々が、いっしょうけんめい応援してくれている、と。
同じように、日本中からの応援を実感したのは、ごみやがれきがいたる所に
積み上げられた街を走る、日本各地から駆けつけた収集車トラックでした。
バスの窓から車体に書かれたさまざまな町の名前を目にしたとき、思わず涙が
あふれたのを今も思い出します。

神戸が見ちがえるようにうつくしい街になったのは、神戸の人たちががんば
ったのはもちろんですが、がんばろうとする力を与えてくれたのは、世界中か
らの、日本中からの、見知らぬ人々からの応援でした。

各地で災害が起きたとき、神戸の人々が自分にできることは何か、と考えて
いち早く行動に移そうとするのは、この時の体験があるからだと思っています。

どうかみなさんに、地震のとき、世界中の人々から応援してもらったことを知
ってほしいと思っています。そして、これからの生き方に生かしてほしいと心から
願っています。

2010年1月31日

はやの みちこ

● 子どもたちへ

大切な大切な 命を授かって 生まれてきてくれた君達へ

スイッチを入れると電気がつく。蛇口をひねると水がでる。

行きたい所へ電車や車ですぐ行ける。

もういない!! 食べたくない!! と言える程の食品にかこまれている。

そんな今の生活は、けしてあたり前ではないのよ。

今、あたり前にあなたの側にいる大事な人が、たった一瞬でもう二度と会えなくなってしまうかもしれない。

ずっとこのまま、永遠に続くものはないのよ。

1ℓのお水の使い道を考えた事があるかしら?

つけっぱなしや、出しっぱなしはやめようね。

仕事から帰ってきたお父さんに、お疲れ様って、

洗濯物やごはんの支度してくれたお母さんに、ありがとうって、

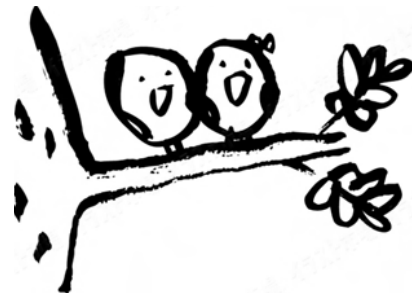
おかえりって声かけてくれたおじちゃんおばちゃんに、ただいまって、

言葉で伝えようね。

うれしい事は倍に、悲しいことは半分になるから、話そうね。

あたり前すぎて忘れかけている、本当は「とてもよかった」事に、きちんと言葉

にして感謝しようね。



平成22年1月8日

おかあちゃん

■ 感謝の気持ち(助け合い)

● 子どもたちへ

震災15年目の2010年1月17日の今日、この文を書いています。正直なところ、まだ命については書くことができませんが、どうかそのところは許して下さい。今回は、ちょっと心に残った良い思い出を書きますね。

全壊した家から取り出した少しの品物をスクーターで運んでいた時のことです。スピードはあまり出さず、ゆっくり走っていました。交差点にさしかかりました。車はあっちからもこっちからも走ってきます。当然、信号機は故障しています。交通整理の人もいません。

私はドキドキしながら運転していました。でも、ちっともぶつかりません。すうすうと車の流れは以前よりスムーズです。さて、どうしてでしょう？

それは、順番に一台ずつまがる車、まっすぐ進む車が、それぞれお互いを思いやりながら運転していたからです。その時、「ああ人間っていいなあ。捨てたもんじゃないなあ。」とほんわり、心にしみりました。そしてハッとしました。

自分を守ることと、相手を思いやることは、実は同じことなのかもしれないと気づかされたのです。

こういうステキな話と同じくらい、イヤな話もあるかもしれません。でも私は、次の神戸をつくっていくあなたには、ステキな話を覚えていてほしいのです。人の良い面を見てそこを育てていってほしいのです。今よりも、もっともっとステキな神戸の街をつくるために。

最後に、今、生きている子どもたちみんなにお礼を言わせて下さい。みんな産まれてきてくれてありがとう!! がんばって、生きていてくれてありがとう。

2010年1月17日

神戸っ子

● 子どもたちへ

おかあさんがしんさいにあった時は^{とき}中学^{ちゅうがくにねんせい}二年生でした。15年前^{ねんまえあさ}朝ねている時に「ガチャ ガチャン」と、^{いま}今でも^{おも}思い出すと^{ほんとう}本当にこわくて、もうしんさいにはにどとあいたくない^{きも}気持ちです。

家^{いえ}の中^{なか}は、ダンスもれいぞうこも、なにもかもたおれて、すぐおばあちゃんの家^{いえ}までしんぱいで行^いったら、まわりは火^ひだらけで家^{いえ}もこわれていました。

おかあさんがその^{ときおも}時思ったことは、みんなしんせきもぶじでよかったなあ、^{おも}と思いました。でも泣^ないている人^{ひと}や、かぞくを亡^なくされた人^{ひと}をみて、むねがいたかったです。

おかあさんたちは、みずき^{しょうがっこう}小学校でひなん生活^{せいかつ}をずっとしていました。きゅうしゅうから、しんせきがしんぱいしてきてくれたり、知らない人^{ひと}たちから、おべんとうを^{いと}いただいたり、かせつのおふろを^{いと}よういしてくれたり、まわりの人^{ひと}にたすけられてるんだなあ^{おも}と思いました。

そのことを^{いま}今でも^{おも}思い出すと、たすけあいはたいせつ^{おも}と思います。こまっている人^{ひと}や、^{からだ}体のふじゆうな人^{ひと}とかいたら、やさしい^{きも}気持ちでせっしてあげてほしい^{おも}と思います。みんながやさしい^{こころ}心をもって、へいわにくらしていけば、きっといいせかいになる^{おも}と思います。

おかあさんが、しんさいをけいけんして^{いまおも}今思えることは、「やさしい^{こころ}心」「たすけあう^{こころ}心」「いのちを^{たい}大せつにする」「いじめを^{おも}しない」「思いやり」「かんしゃのきもち」が^{たい}大せつにしたいです。

平成22年1月13日

芝脇 真佐美

感謝の気持ち（助け合い）

● 子どもたちへ

とうじ わたし くるまつうきん ほんらい すうぶん い じかん
当時、私は車通勤だった。本来なら数分で行けるところでも、かなりの時間
よう とちゆう はし じわ だんさ
を要した。途中ある橋にさしかかった。地割れがしており、かなりの段差があ
ったが、どの車もおそろおそろではあったが、何とか通過していた。

わたし くるま つうか とき わたし つうか
いよいよ私の車が通過する時がきた。私もおそろおそろゆっくりと通過し
ようとしたが、大きく車体が前につんのめり、全く動けなくなった。ちょうど
わたし まえ はし だんさ おお
私の前を走っていたのがトラックだったので、さらに段差が大きくなっていた
のかもしれない。

わたし うし く ひとたち はや なら
私は後ろから来る人達に「早くいけ」と、クラクションを鳴らされ、どなり
おこられるだろうと不安になった。ところが、後ろの車の人達が、次々に降り
てきて、私の車を大勢の人の力で持ちあげて、私の身体が大じょうぶかど
うか心配すらして頂いた。どの人も急いでいたに違いないのに・・・。

ご まわ ひとたち つぎつぎ あつ くるま つうこう いし つ
その後、周りにいた人達も次々に集まり、車が通行できるように石を積みあ
げて、段差を少しでもうめようと協力しあった。私は助けて頂いた人達に、
ただ一言、「どうもありがとうございました。」と言ってその場を去った。普段な
らばクラクションを何度も鳴らされ、ば声をあびせられる場面だ。しかしあの時、
みな ころろ ひと だれ わたし せ ひと
皆の心が一つになったのだ。誰も私を責める人はいなかった。それどころか、
じごくえず なか わたし ころろ あたた あた うんてん わたし
地獄絵図のような中、私に心の暖かさを与えてくれた。運転しながら私は
なみだ と
涙が止まらなかった。

なん おお どうろ で しんごう まった きのお ろじょう おお
何とか大きな道路に出た。信号が全く機能していなかった。路上には多くの
ひとひと ふうけい わたし しゃしん とう み
人々がうろたえており、あたりの風景は、私が写真やテレビ等だけで見たこと
のある戦争直後のようだった。それでもドライバーの人達は、私の知る限りで

はなかった。それぞれ道^{みち}をゆずり^あ合い、お互い^{たが}目^めや手^てだけで暗黙^{あんもく}のルールが^{みな}皆の
心^{こころ}にやどっていた。

あの^{だいしんさい}大震災で、かけがえのない^{たいせつ}大切なものを^{うしな}失^{ひと}った人は^{かぞ}数えきれない。

しかし、どん^{ぞこ}底^おに落^{とき}とされた時^{ひと}は、いかに^{ひとひと}人々の心^{こころ}が^{ひと}一つ^{しん}になれるのか、真
に^{ふか}深い^{たが}お互い^{おも}の思い^{こころ}やりの心^もを持つ^もことができるのか、ということ^{わたし}を私に
気^き付^づかせるものでもあった。

2010年1月12日

前橋 啓治



感謝の気持ち（助け合い）

● 子どもたちへ

「感謝の種」

「感謝」には「種」があると思います。誰かに感謝の気持ちを持った時、自分の心には感謝の種がまかれ、その種はやがて育ち、花を咲かせ、実がなり、そして又種を作り、その種は違う誰かの心にまかれ、又花を咲かせていくのだと思います。

私は、あの阪神・淡路大震災で母を失いました。すぐにかけてつけた時、2階建てのアパートは見るかげもなく、がれきと土の小高い丘の様でした。道具も知恵も勇気もなく、立ちつくす私の前に現れたのは、近くの工務店の寮に住む若い男の人達でした。彼らは、まだまだひどい余震が続く危険な状態の中、がれきをかき分け、生き埋めになっているアパートの住人を次々に救い出してくれました。でも、最後にみつかった私の母は、呼んでも呼んでも返事をしてくれる事はありませんでした。

その時の光景は、決して忘れる事はないでしょう。でも、それと同時にいつも思い出すのは、あの勇気ある寮生たちの行動で、私はその度に深い感謝の気持ちを覚えます。そして不思議な事に、その感謝の気持ちは薄らぐ事なく、逆に日に日に深く大きなものになっていくのです。

私は、あの震災の日、私の心に感謝の種がまかれたのだと思います。そして、その種は育ち、今私の心に花を咲かせているのだと思います。この花が実になり、種を作り、私も又誰かの心にその種をまく事ができればうれしいなと思います。

2009年11月22日

小河 昌江

● 子どもたちへ

はんしん あわじだいしんさい
阪神・淡路大震災がおこった時、わたし にしく す
私は西区に住んでいて、ひがい
被害はそれほどひ
どくはありませんでした。けれど、でんき
電気、ガス、すいどう ぜんぶと
水道は全部止まり、ふべん おも
不便な思い
をしました。その時^{とき}にひごろ
日頃そなえていてやくだ
役立ったことをつた
伝えたいとおも
思います。

・ラジオ付懐中電灯

じしん
地震がおこったのは、ひ
陽がのぼるまえ
前だったので、かいちゆうでんとう
懐中電灯がやくだ
役立ちました。
また、テレビもつかなかったので、なに おこったのかし
何が起こったのか知るのに、ラジオがやく
役に立ちました。

・お風呂のため湯

みず で
水が出なくなったので、なが
トイレを流すのにりよう
利用しました。

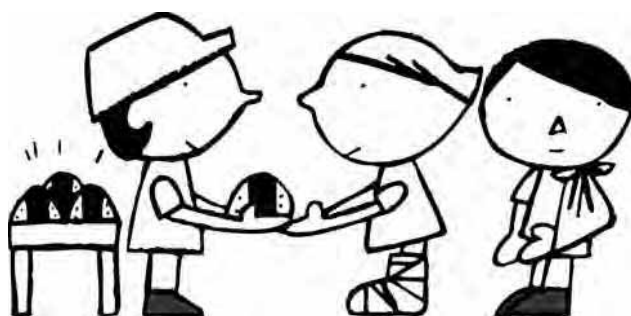
・飲料

か
買いだめしていたかんいんりょう
缶飲料で、とりあえずのすいぶんほきゆう
水分補給ができました。

じしん とつぜん
地震は突然やってくるので、ひごろ
日頃からじゅんび
準備しておくことがたいせつ
大切です。

こ
子どもの頃、ころ
地震に対するたい
防災意識のぼうさいいしき
高いたか
静岡に住んでいたの
ので、その時^{とき}に
み
身につけた、じしん
地震に対するたい
心構えのこころがま
のおかげで、とっさのとき
の時にもあわてず
行動で
きました。

がっこうとう おこな
学校等で行われるぼうさいくんれん
防災訓練は、しんけん
真剣にとりくむやくだ
と役立ちます。



2010年1月6日

● 子どもたちへ

震災が起こると、たちまち別世界になってしまいます。

水、電気、ガスが止まると、当たり前前にできていた生活ができなくなります。

スーパー、コンビニなど、全てのお店がしまっていて、買い物もできません。

道路も家がつぶれていたり、電柱が倒れていて車も通れません。電話もなかなか通じません。

あなたも想像してみてください。今、こんな状況になったとしたら、どうしますか？まだこれ以上に、大切な家族をなくしてしまった人、家が焼けた人。こんな人があなただったら、どう思うでしょうか？多分、想像する事もなかなかできないでしょう。でも、再び起こってしまうかもしれません。

その時にどうすればいいのかを、この機会にしっかり、TVを見たり、話を聞いたり、本を読んで、考えてみてください。お父さんやお母さん達が、工夫した事、苦勞した事を教えてもらい、いざとなった時、行動できるように意識してみてください。

私は幸い家も無事で、電気が来ていたので、ご近所の方々をお世話させていただきました。大変な時に何ができるかと考えた時、お世話になるより、させていただける事の幸せを感じて、家族全員で精一杯がんばりました。

そうしたら、いっぱい“ありがとう”をいただきました。

本当によかったと思います。あなたも、色々な震災の話聞いて、しっかり考えてみてくださいね。

大震災十五年

子どもたちへ伝え残そう続けよう!!



阪神淡路大震災のこと...

一九九五年一月十七日午前五時四十分

マグニチュード強激震あり

六四三四名の尊命犠牲に...

まだ明^{あけ}けやらぬ寒き朝^{あさ}あの日^ひあの時^{とき}大地^{ちがひ}はうねり

びく音^ねとどろき閃光^{せんこう}走り^{はしり}神戸^{かんと}の街^{まち}はカキ化^{かきか}した

家族^{かぞ}や友^{とも}も引きはなし^{ひきはなし}働く^{はたら}街^{まち}も焼^やきつくし

汽笛^{きびつ}の音^ねも消^きえ去^さりし

あから月^{つき}日は夢^{ゆめ}のこと

神戸^{かんと}の街^{まち}はカキ化^{かきか}した力を合^あわせて頑^{がん}張^{ぱん}った

ボランティア^{ボランティア}のやさしさと日本^{にっぽん}全国^{ぜんこく}世界^{せかい}の人^{ひと}の思いやり

神戸^{かんと}に元^{もと}気^きとれた

ビル^{ビル}建^たち並^{なら}び活^か力^{りき}復^ふ興^{こう} 人^{ひと}の集^あい笑^{わら}いあ

緑^{きょ}の木^きと花^{はな}咲^さき匂^{にお}ひ 子^こら輝^{かが}め笑^{わら}顔^{がほ}の街^{まち}に

それ^{それ}も悲^{かな}しく癒^なる人^{ひと} 孤^こ独^{どく}にふるえ人^{ひと}が

今^{いま}こそ大^{だい}震^{しん}災^{さい}の教^{きょう}訓^{くん}を

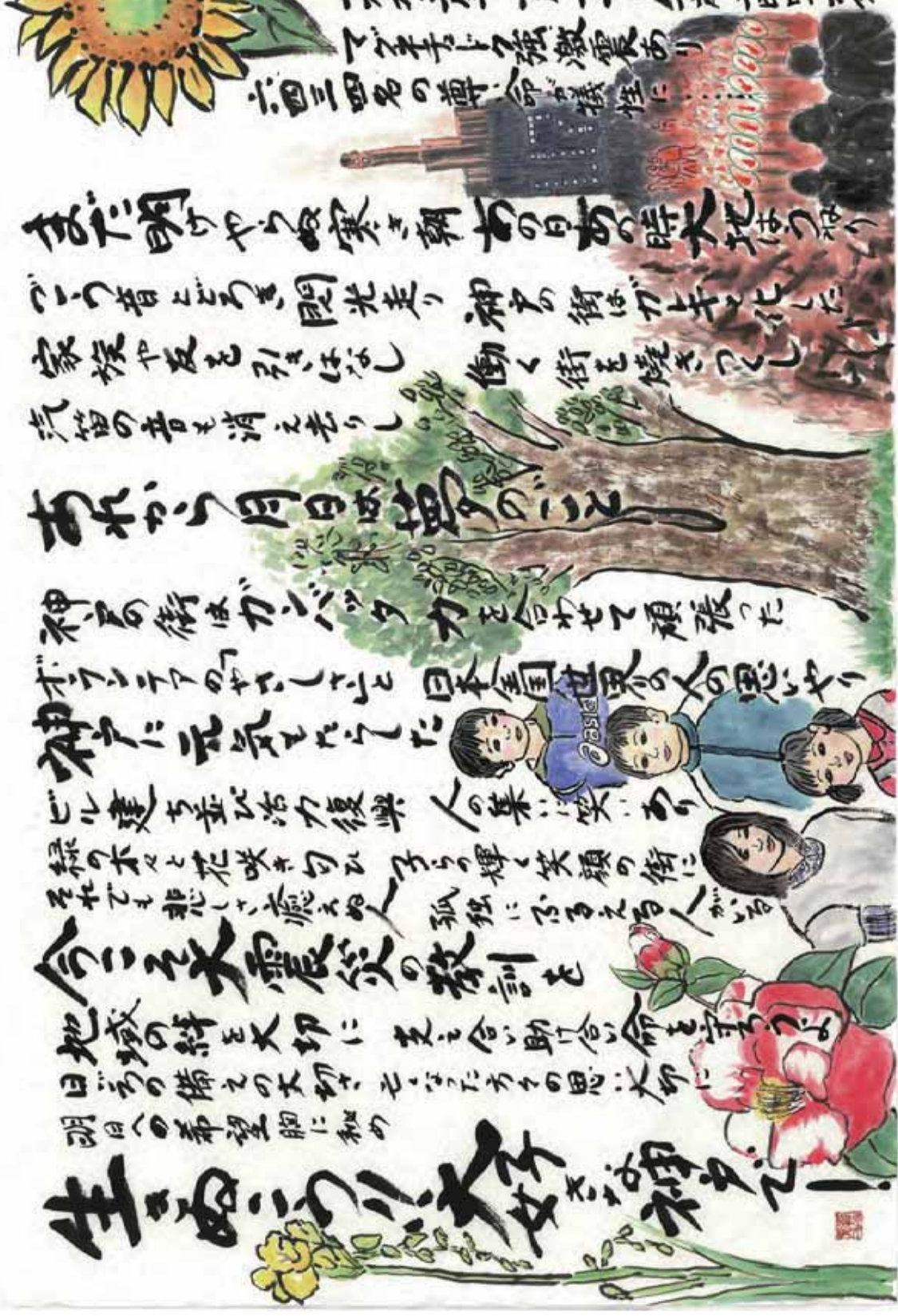
地^ち域^{いき}の絆^{きずな}を大^{だい}切^{きつ}に 支^{たす}け合^あい助^{たす}け合^あい命^{いのち}を守^{まも}り

日^ひあの日^ひの備^{そな}えの大^{だい}切^{きつ}さ 七^{なな}な方^{かた}の思^{おも}い大^{だい}切^{きつ}に

明日^{あした}へ希^き望^{ぼう}胸^{むね}に秘^ひめ

生^{なま}ぬらひ女^め子^こは神^{かみ}の

花^{はな}と



負けたくない

逃げたくない

諦

めたくない

相対さえあれば

いつか芽が出る

世間がでる

仕度しなく



秀苑作



消防隊員の震災手記

震災15年を迎え、今回は神戸市消防局より「消防隊員の震災手記」をメッセージとしていただきました。

その中から二つの作品をご紹介します。

(※震災直後に書かれた作品で、所属も当時のものです。)

◆ 阪神・淡路大震災記録資料展 / 絆 ～つなぐ命、こころ～ ◆

阪神・淡路大震災から15年を迎えた平成22年1月、『子どもたちへのメッセージ展』とあわせて、消防局による『阪神・淡路大震災記録資料展』が開催されました。

震災15年を迎えるにあたり、震災の記憶や経験を風化させないように、消防局が撮影した震災当時の未公開写真や震災手記、震災をきっかけに発足した機関の活動写真が展示されました。



消防隊員の手記

～ 「娘を助けて。」手を合わせる母 ～

ふだんと変わりなく、救急出動の要請を受けて現場であるマンションの一室に駆けつけた。そして、急病人の耳元で病状を聞いていたまさにその時、悪夢が始まった。

急に床が横揺れを始め「地震だ」と、別の隊員が叫ぶ。数秒後には収まるかと思った瞬間、私の地震に対する感覚をはるかに超える激しい縦揺れがし、ドスン、ドスンと体が下から激しく突き上げられ、バランスが崩れる。グオー

と地鳴りがし、爆弾でも落ちたかと思うほどだった。心の中で叫んだ。

「いったい、何が起きたんや」部屋の電気が消え食器棚が倒れる。仲間が気にかかったが暗闇の中から「大丈夫だ」の声を聞きホッと安心する。ペンライトの明かりを頼りに急病人を伴い、散乱した部屋を後にし救急車へ戻った。

少し進むと住民が駆け寄ってくる。車の窓を開けるとガス臭が鼻を突く。闇の向こうでシャーっと水でも湧き出しているような音がする。エンジンをかけるだけで爆発するのではないかと思うほどだ。すぐに本部に無線連絡するが応答がない。再度非常ボタン

を押すが同じだ。車載電話は使用不可能となり連絡を断念。

また、少し進むと、「民家が倒れている。中に絶対人がいるはずだ」と付近の住民に呼び止められるが、どこにも連絡



がとれない状態では、我々だけでは何もできない。また、急病人を搬送中であることを説明し、ガス漏れも気になったので先へ急ぐことにした。

あたりは真っ暗で、崩れている民家や倒れかかった電柱、落ちている電球などで思うように走行できないなか、国道43号へ。いつも見慣れた町並みはそこになく、ヘッドライトに映し出された巨大な壁が眼前にそびえ立つ。近づくとつれてその実態が明らかになる。思わず、「ヨンサン(国道43号線)が倒れとる」という言葉が口を突いて出た。実際に倒れていたのは43号の上を走る阪神高速だったが、左右とも終わりなく横倒しになっているのではないかと。背筋がぞっとし、上気している自分がわかった。不気味な阪神高速を横に見ながら、深江交差点から住宅街へ入ると、また何度も住民に行く手を止められる。やっこの思

いでおおぎしゅつちようしょ ひがしなだしょうぼうしょ まえ で すでにしょうぼうたい しゅつちようしょちか
いで青木出張所（東灘消防署）前へ出る。すでに消防隊は出張所近くで
しょうかかつどうちゆう
消火活動中であり、とりあえずぜんいんのぶじかくにん
無事を確認し、ガス漏れを伝えて我々は
ないかとうばん ひがしこうべびょういん む
内科当番の東神戸病院に向かった。

こくどう ごう で じょうようしゃ へいそう まど み の だ われわれ
国道2号に出ると、乗用車が併走してきた。窓から身を乗り出して我々の
きゅうきゅうしゃ と ていしゃ そと で じじょう き はは うで お
救急車を止めようとする。停車し外へ出て事情を聞くと、「母の腕が折れてい
る」という。「外科の先生が当直やかから、この病院に運んで」と宮地病院の方
をしじ ひと か びょういん はい
を指示すると、そらからも人が駆けてくる。そして、「病院に入れへん」
という。

「なんで？」目を凝らしてよく見ると、いつも出入りしているきゅうきゅうたいでい
救急隊出入り
ぐち かい かんぜん くず さ
口がなく、1階すべてが完全に崩れ去っているではないか。「えっ」と、つぶや
いたくち と さくやはなし せんせい かんごふ うけつけ ひと あんび き
いた口が閉じない。昨夜話をした先生、看護婦、受付の人の安否が気になる。
しばらくのちんもく が、しみん ま かんない べつ びょういん おし
しばらくの沈黙。が、市民は待ってくれない。とりあえず管内の別の病院を教
える。

そのころ そら あか はじ とうかい みんか てんざい
頃には空も明るくなり始め、倒壊した民家があちこちに点在しているの
がみ かつ ふしょうしゃ で よそう てきちゆう ふだん ばい
が見えた。「すごい数の負傷者が出ているはずだ」という予想は的中。普段の倍
いじょう じかん ひがしこうべびょういん とうちやく ひと しゃがい
以上の時間をかけ東神戸病院へ到着すると、すでに人があふれている。車外
で どうじ すうにん み み あつ はんそう
に出ると同時に数人が、「診てくれ、診てくれ」と集まってくる。搬送してきた
きゅうびょういん りかい もと われわれ にんべつべつ おうきゅうしよち か まわ あいだ ひさい
急病人に理解を求め、我々3人別々に応急処置に駆け回る。その間にも被災
したひと かぞく きんじょ ひと はこ
した人が家族や近所の人によってどんどん運びこまれる。

むすめ たす ははおや さい おんな こ だ
「娘を助けてください」と、母親が3歳くらいの女の子を抱いている。す
でに、しん こきゅうていしじょうたい いそ しんばいそせい じっし じょうたい わる
でに、心、呼吸停止状態。急いでCPR（心肺蘇生）を実施するが状態は悪い。
じじょう き じしん さい あぶ おも ははおや おお かぶ うえ かざい たお
事情を聞くと、地震の際、危ないと思い母親が覆い被さったその上に家財が倒れ
かかりだ
かけられなくなったという。

たす たす なんど なんど ははおや わたし む て あ
「助けてください、助けてください」何度も何度も母親が私に向かって手を合

わせ祈る。自宅から駆けつけていた医師に診断してもらい、「死」が両親に告げられる。胸が痛む。

「私が殺した」と母親が号泣。「くそー、くそー」と父親が叫ぶ。私にも子どもがいる。どうしてもだぶらせて考えてしまう。目頭が熱くなる。このような悲しい場面の連続で、「夢ではないか、夢であってほしい」と願う。

時間が経つにつれ死者が増える。2時間もすると病院のフロアは足の踏み場がないくらいけが人で埋め尽くされている。人々の目は怯えている。



その後、病院から「切迫流産の患者がいるがここでは処置ができないので別の病院へ」と、転院要請を受け、救急車内に残していた傷病者とともに9時頃甲南病院へ搬送。3時間以上かけた病院搬送を終えた。

その後も延々と救急活動は続くのだが、この約3時間、あまりに多くの死、別れ、悲しみ、涙、後悔、絶望、そしてあてはまる所のない怒りを目のあたりにした。この現実離れした事実を受け入れるには、あまりに短い時間だった。私の中には長くつらい時間が残るだろう。

帰署途中、少し放心状態のなかでつけたラジオの放送は、現実から大きく離れており、一層気分が滅入った。「神戸の方面で大きな地震があり、死者は百人以上程度でている模様」という。

「何ってんねん、もうその半分は見てきたわ」と心の中で叫んだ。

谷内 康雄（東灘消防署）

消防隊員の手記

～ 血染めのハンマー。「母さんすまん」 ～

1月17日、神戸を襲った地震から10時間が経過している。

灘区弓ノ木町、山手幹線沿いのコンクリート造り3階建て店舗兼住居に「男女2名生き埋め」との情報を受け現場に向かう。

地震発生から七時間が生存のリミットタイムなのだが、今回の大災害で私たちが救出し生存していた確率は一割に満たない。この事案でも危険な時間が迫っていた。

現場到着すると家族が倒壊した建物の前に立ち、私を見つけるや否や、「親父を助けて下さい。返事はしますし、意識もはっきりしています」かなり興奮気味に言った。だが、情報では男女2名とあったので、「もう1名は？」と聞くと、「お母さんは、親父の横で息を引き取りました」と唇を噛みしめていた。

建物は、1階が店舗、2階が事務所、3階が住居で、屋上には家庭菜園と大型収納倉庫二つが並んでいる。1階の店舗は陳列物が散乱し、柱が倒れ、2階については床が斜めになり

不安定な状態で、3階は完全に押し潰され進入することはできない。

私たちが到着するまえに家族の方が、2階の天井に15センチ位の穴を開け、上階のベット位置を確

認し、東側に頭を向けて寝ていることもわかっていた。



救出は困難を極めた。3階部分は地震による屋上の重みに耐えきれず、いつ作業している2階に落ちてくるかわからない。また、余震への恐怖感とが重なりなかなか救出が進まない。活動当初、ベットをある程度破壊し救出しようとするが、足場が不安定であり、隊員2名がやっと入れるスペースしかないために、活動が十分にできず、そのうえベットの鉄製スプリングが邪魔をして上手くいかない。他にいい方法がないかと屋上に上がり、上からの救出を試みるが、大型収納倉庫を移動させるしかなく、それを行う時間もなかった。要救助者に呼びかけるが、だんだん声が弱くなっていく。

だが、何かよい方法はないかと、私は隣の東側の建物に進入し壁を破壊して救出できないものかと考えて、中隊長にその旨を伝え、隊員2名と2階ベランダから進入した。その部屋は空き家で木造モルタル2階建てで、高さも要救助者がいると思われる位置であった。「一か八か、やってみることでなんらかの結果は出せる」と自分自身に言い聞かせた。救出隊を2班に分けて一隊をベットの破壊に、もう一隊が壁を破る二つの方法で救出をはじめた。

交替で壁を破ること1時間、ようやく倒壊建物の東側のコンクリートの外壁が見えた。しかし、見るからに頑丈そうな感じで、破壊する隊員の手は次第に豆だらけになり、疲労の色も隠せなかった。血に染まるハンマーを振りながら、コンクリートを叩いては鉄筋を切り、切っては叩きを繰り返し、ほとぼしる額の汗を拭い、やっとの思いで直径30センチの穴を開けた。

それは、希望の扉でもあった。だが喜びも東の間、強力ライトで穴を照らすと、いくつも重なる柱やタンスが倒れているのがわかった。予想していたよりもはるかに状態はひどかった。強力ライトを持つ手を肘くらいまで入れ、「お父さん、ライトの光わかるか」と呼びかけた。数分間の沈黙の後、「北方向からかすかに見える」と、答えがあった。が、喜んではいられなかった。いつ

よしん かんが しぜん ふ て ちから はい みずか はげ
余震がくるかと考えると、自然とハンマーを振る手にも力が入り自らをも励
ますように、「大丈夫か。もう少しやぞ」と大声で呼びかけると、応える声にも
ちからづよ
力強さがあった。

ようやく、人ひとりが抜け出せる大きさの穴が開くと、約1.5メートル先に
よこ ようきゅうじょしゃ すがた み うご たし あし なに の
横たわる要救助者の姿が見えた。動けるかどうか確かめると、「足に何かに乗
っていて身動きができない」という返答があったため、隊員1名が穴に入り、引
っぱ び
っぱり出した。ようやく救出できたが、その顔はやつれ、一人では立ってい
られない状態だった。

「ありがとうございました。妻は救出できますか」と、隊員2名に抱えら
れながら堰を切ったように尋ねてきた。隊長から重機が必要との説明を聞くと、



むごん どうかい たてもの む
無言で倒壊した建物に向きなお
り、手を合わせた。

「お母さん、すまん」お父さん
のおえつ へや ひび
の嗚咽が部屋に響いた。

しぜん め み ちから
自然という目には見えない力
が、ゆめ きぼう まち あい ひと うば
が、夢や希望、街や愛する人を奪
った。

『神戸』とは、『神の戸（扉）』と書くが、その扉が今、閉ざされたのか、
それとも我慢できずに開け放たれたのか。あまりにも神は我々を傷つけ、自然と
いう暴力は大きすぎた。

じしんはっせいじ なんと いま じぶん わる ゆめ み おも つよ
地震発生時、何度も「今、自分は悪い夢を見ているのだ」という思いが強く、
め まえ ひろ じごく りかい じかん いま さいがい
目の前に広がる地獄を理解するのに時間がかかった。今まで、どのような災害に
であ なかま きゅうしゅつ きゅうじょ しょうかつどう しごと ほこ も
出合っても、仲間とともに救出、救助、消火活動をし、この仕事に誇りを持
っていた。が、今回は違った。助けを求めてきている人々に応えることのでき

ない^{じぶん}の^{ちから}力の^{なげ}なさを^{なげ}嘆き、自然^{しぜん}の^{おそ}恐ろしさに^{きょうい}驚異^{かん}を感じた。

しかし、この^{じあん}事案^{はっせい}では^{じかん}発生^{けいか}10時間^{せいぞんりつ}が^{きわ}経過^{ひく}し^{せいぞんりつ}生存率^{きわ}が^{ひく}極めて^{ひく}低^{ひく}かったのにも^かか^わら^ず救^{きゅう}出^{しゅつ}できた。それは、^{きせき}奇跡^{ちか}にも^{にんげん}近い^{つよ}人間の^{つよ}強さ^{かん}であると^{かん}感じた。

1ヶ月^かが^{げつ}過^すぎても^{よしん}いまだに^{よしん}余震^なが^おつづき、^な何^おが^お起^おきても^おお^かしく^ない^が、
『^{ぼうさい}防災^{まちこうべ}の^{まち}街^{こうべ}神戸』を^{めざ}目指し、^{ひと}人^{あんしん}びと^くが^あ安^{しん}心^くして^く暮^くらせる、^{えがお}笑^え顔^おの^た絶^ええ^{ない}ない^{まち}街^{まち}づ^くくり^くりに^{びりよく}微^{びりよく}力^くながら^く尽^つく^{して}い^きたい。

この^{まち}街^{ふっこう}が^ふ復^ふ興^ひできる^ひその^ひ日^ひまで・・・

東 泰宏（灘消防署）



このメッセージを^よ読んであなたが^{かん}感じたことを^か書いてみてください。

A large rectangular area with horizontal dashed lines for writing.

子どもたちからの感想文

平成20年度中に寄せられたメッセージを協力校とな
っていた学校にお届けしたところ、友が丘中学校
よりたくさんの感想文をいただきました。



その中からいくつかの感想文をご紹介します。

■ 子どもたちへのメッセージを読んで

嶋田 嶺花

「あたり前の生活に大切な忘れ物はないですか？」

この言葉を読んで、私はとても考えさせられました。今ではあたり前のこ
とが、あの時にはあたり前にできなかったことは、小学校の時から何度も聞か
されていたので知っています。水が出ない、電気がつかない、たくさんのこと
を聞きました。でもそんなことを気に留めず生活している自分がいました。そ
のようなことが震災の風化につながるんだと思います。記憶にはないけれど、
震災を経験した最後の子どもとして、風化させない義務があると思いました。

■ 子どもたちへのメッセージを読んで

河野 智哉

「あと20分くらい地震が遅く起こっていたら・・・。」この言葉にこめら
れた気持ちが、悲しみと共に伝わってきた。1月17日、僕はまだ生まれてい
なかったので、どのようなものだったのかは分からない。けれど、この地震に
よって人々がいただいた気持ちや、必ずある恐怖、悲しみは分かった気がする。
毎日普通に生活できること、友達と話ができるということが、どれだけ幸せ
なことなのか。そして「生きる」ということのありがたさを強く感じた。

■ 子どもたちへのメッセージを読んで

関 友愛

いえ 家がつぶれる・まち 町からはたくさんの火・かぞく 家族やゆうじん 友人の死・・・。

こんなことがつづ 続けざまにおこったら、きっとわたし 私はかな 悲しみやふあん 不安であたま 頭が一杯になり、どうしようもなくなくなってしまうとおも 思う。しんさい 震災をけいけん 経験していないわたくし 私 想像してもこんなふう 風にかんが 考えるのだから、じっさい 実際にはことば 言葉であらわ 表せないぐらいたいへん 大変だったとおも 思う。

いまわたし 私 今が生きているのも1つのきせき 奇跡、なぜならしんさい 震災ではは 母やちち 父がしん 死んでいたら、わたし 私 今生きてはいないからだ。しんさい 震災でさまざまなおも 思いをう 浮かべながらな 亡くなっていったかたたち 方達がいること。そしていま 今もしんさい 震災のことでくる 苦しんでいるひと 人がいることをわす 忘れないでいきたい。つぎ 次世代にもしんさい 震災のことをつた 伝えて、これからもいっしょうけん 一生懸命生きていきたい。じぶん 自分が生きていること、いろいろなひと 人にささ 支えられていることにかんしゃ 感謝して・・・。

■ 子どもたちへのメッセージを読んで

森本 恵

たくさん 沢山のメッセージにきょうつう 共通してか 書かれていること。それはあのひ 日をわす 忘れてはいけないということだとおも 思う。それをわたし 私 がさらにこころ 心にきざ 刻み込まれたのは、ことし 今年のしんさいとくばん 震災特番「こうべしんぶん 神戸新聞の7日間」からだった。そこには「すみません」となみだ 涙をこらえながらシャッターをきるきしや 記者に向かい「と 撮るなあ」とさけ 叫ぶひさいしゃ 被災者のすがた 姿があった。じっさい 実際の事だったと思えば思うほど、おも おも 胸がしめつけられるおも 思いがした。

きしや 記者がなみだ 涙をこらえてうつ 写してきた、つら 辛いくる 神戸。そのなか 中にはいろ いろのおも 思いをかか えている。いのち 命をうしな 失った人のきもち 気持ちがつまっている。いま 今、そのこうべ 神戸で暮らしているわたくし 私 は生きていくまいにち 毎日が来ることを、あたりまえ 前だとかん 感じてはいけないとおも 思った。そしていま 今のキレイなこうべ 神戸をつく 作ってきたたす 助けあ 合いのこころ 心を、これからもわたくしたち 私達 が築いていかなければならないとつよ 強くおも 思った。

■ 子どもたちへのメッセージを読んで

谷本 奈菜

・・・いちばん印象に残っているのは、「普通の大切な日常の過ごし方」という言葉です。いつ起こるか分からない地震で、大切な人やものを失う前に、1日、1日を大切に生きていかなければいけないと思いました。

津野 孝文

僕たちは震災を体験していないので、人の話でしか震災の恐ろしさを知ることができません。

この子どもたちへのメッセージを読むと、最後には「1日1日を大切に過ごしてください」と書いている人がいました。

「しあわせ運べるように」の歌にもこの言葉があります。震災を体験していないので、この言葉を忘れることもあるけれど、震災の話などを聞いて、この言葉を思い出したときには、震災で亡くなった人のためにも、1日1日を大切にしようと思います。

飯田 咲希

私は、このメッセージを読んで「地震は誰も止めることが出来ない」という事が改めて分かりました。「戦争は平和を守り続けなければ止められる。しかし自然災害は誰にも止められない・・・。」と書いてありました。

普通に生活していた人々が、自然災害によって突然亡くなっていくことは本当に怖く、つらい事だと思っています。いつ起こるか分からない毎日の中で「あたり前の生活」が出来ている事に感謝し、亡くなった人々の分も1日1日を大切に、悔いの残らない生活をしていきたいです。

野本 加奈子

・・・1月17日は私の誕生日です。震災のまる一年後に私は生まれてきました。だから自分の誕生日が来ると震災を思い出します。1月17日に亡くなった方の分も、1月17日に生まれた私が精一杯生きていきたいです。

みんなが今、あたり前の日常を大切に、たくさんの人に感謝して生きていかなければいけないと思いました。

丸尾 佳純

・・・考えただけで胸が苦しくなります。だから、これを実際に味わった人はどれだけつらかったか。この震災で大切な人を失った人は、毎日をどんな気持ちで過ごしているのか。

普通に生きていることがどれだけ幸せか、自分の命、人の命はどれだけ大切かをしっかり次の子どもたちに伝えたいと思います。・・・

公門 亮太

・・・大切な事は地震が起きた時にどうするか?・・・助け合い、支え合い、励まし合い、1人では生きていけないのだから助け合わないといけないんだ。・・・1人で出来ない事も2人なら出来る。10人じゃ出来ない事も100人だと出来る。僕はこういう自然災害が起きた時に「真の絆」が試されるんじゃないかなあと思いました。地震はいつ起こるか分からない。・・・問題はどれだけ助け合えるかだと思います。

しあわせ運べるように 作詞・作曲 臼井 真



じしんにもまけない つよ いころをもって なく
ついたこうべを もとのすがたにもどそう ささ



なつたかたがたの ぶん もまい にちをたいせつに いきていこうきず
えあうこころと あしたへのきぼ



うをむね に ひびきわたればくたちのうた う



まれかわるこうべのまちに とどけたいわたしたちのうた しあ



わせはこべるよう に

一、^{じしん}地震にも ^ま負けない ^{つよ}強い心 ^ををもって ^な亡くなった ^{かたがた}方々の ^{ぶんも}ぶんも
^{まいにち}毎日を ^{たいせつ}大切に ^い生きて ^{ゆこう}ゆこう
^{きず}傷ついた ^{こうべ}神戸を ^{もと}元の ^{すがた}姿にもどそう
^{ささ}支え合う ^あ心と ^{あした}明日への ^{きぼう}希望を ^{むね}胸に
^{ひび}響きわたれ ^{ぼく}ぼくたちの ^{うた}歌 ^う生まれ ^か変わる ^{こうべ}神戸の ^{まち}まちに
^{とど}届けたい ^{わた}わたしたちの ^{うた}歌 ^{しあ}しあわせ ^{はこ}運べる ^{よう}ように



二、^{じしん}地震にも ^ま負けない ^{つよ}強い ^{きずな}絆をつくり ^な亡くなった ^{かたがた}方々の ^{ぶんも}ぶんも
^{まいにち}毎日を ^{たいせつ}大切に ^い生きて ^{ゆこう}ゆこう
^{きず}傷ついた ^{こうべ}神戸を ^{もと}元の ^{すがた}姿にもどそう
^{やさ}やさしい ^{はる}春の ^{ひかり}光の ^{よう}ような ^{みらい}未来を ^{ゆめ}夢み
^{ひび}響きわたれ ^{ぼく}ぼくたちの ^{うた}歌 ^う生まれ ^か変わる ^{こうべ}神戸の ^{まち}まちに
^{とど}届けたい ^{わた}わたしたちの ^{うた}歌 ^{しあ}しあわせ ^{はこ}運べる ^{よう}ように
^{ひび}響きわたれ ^{ぼく}ぼくたちの ^{うた}歌 ^う生まれ ^か変わる ^{こうべ}神戸の ^{まち}まちに
^{とど}届けたい ^{わた}わたしたちの ^{うた}歌 ^{しあ}しあわせ ^{はこ}運べる ^{よう}ように
^{とど}届けたい ^{わた}わたしたちの ^{うた}歌 ^{しあ}しあわせ ^{はこ}運べる ^{よう}ように



～ さいごに ～

このメッセージは、阪神・淡路大震災を知らない・よく覚えていない子どもたちに、命の尊さや震災の教訓を語り継ぐために寄せられたものの一部です。

このメッセージが子どもたちの心に届きますよう、みなさまのご協力をお願いいたします。

◆ 子どもたちへのメッセージ運動の概要

「子どもたちに伝えたい、阪神・淡路大震災に関連する経験や思い」をテーマとして、震災のときに生まれた子どもたちが大人になるまで、毎年、メッセージを募集し、伝えつづけていく予定です。

▶ 16年度から21年度の取組み

年度	メッセージ募集期間	応募数(通)	メッセージ運動展	メッセージ集
16年度	平成16年4月 ～平成17年1月	557	平成17年3月17日～30日	2005
17年度	平成17年2月 ～平成18年1月	256	平成18年3月17日～30日	2006
18年度	平成18年2月 ～平成19年1月	222	平成19年3月17日～26日	2007
19年度	平成19年2月 ～平成20年1月	173	平成20年3月18日～27日	2008
20年度	平成20年2月 ～平成21年1月	153	平成21年3月17日～26日	2009
21年度	平成21年2月 ～平成22年1月	200	平成22年1月17日～28日 3月24日～30日	2010

▶ 22年度の取組み

前年度同様に、メッセージを募集しています。

詳細は、神戸市のホームページをご覧ください。下記までお問い合わせください。

ホームページ検索

お問い合わせ先：神戸市保健福祉局総務部人権推進課 電話 322-5234

《子どもたちへのメッセージ運動の活動にご協力いただいた方々》(五十音順、敬称略)

絵手紙「栄」フレンズ、クリスタル・ベル、神戸市PTA協議会、神戸市立幼稚園PTA連合会、神戸市立小学校PTA連合会、神戸市立中学校PTA連合会、神戸市立高等学校PTA連合会、神戸市立盲・養護学校PTA連合会、神戸学院大学地域研究センター、神戸市混声合唱団、神戸市老人クラブ連合会、神戸デザイナー学院、神戸ヤングクリエイティブクラブ、サークル紙ふうせん、スタジオ・チーズ、大日通周辺地区まちづくりを考える会、日本赤十字社兵庫県支部及び声の図書奉仕団

《これまで協力校となっていた学校》

有野東小学校、池田小学校、板宿小学校、井吹西小学校、会下山小学校、榎野台小学校、春日野小学校、高津橋小学校、小寺小学校、塩屋小学校、長田南小学校、本庄小学校、湊川多聞小学校、本山第二小学校、若宮小学校、井吹台中学校、楠中学校、鷹匠中学校、鷹取中学校、友が丘中学校、長坂中学校、長峰中学校、蒼合中学校、本庄中学校、本山中学校、兵庫県立舞子高等学校

＜参考資料＞神戸市「阪神・淡路大震災 被災状況及び復興への取り組み状況」
 (平成22年1月1日現在)より抜粋

神戸市の被災状況等

震災は、多くの命を奪うとともに、都市基盤や建築物に甚大な被害を与え、市民に直接的な大被害を与えた。また、復旧の長期化に伴い、産業、都市機能、生活などに様々な影響を及ぼしている。

<p>(1) 市民生活への被害</p> <p>① 多大な犠牲者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・死亡者 4, 571人 (H17.12.22) ・不明 2人 ・負傷者14, 678人 (H12.1.11) ・高齢者(60歳以上)が死亡者の約59%* ・家屋倒壊による死者多数(窒息・圧死が全体の約70%*) <p>※ 高齢者、家屋倒壊による死者の割合は、平成17年12月22日現在(死者4,571人)での割合(ただし、窒息・圧死の割合は直接死3,895人での割合)</p> <p>② 避難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピーク時：箇所数599箇所(H7.1.26) 避難人数236,899人(H7.1.24) 避難所就寝者数222,127人(H7.1.18) <p>③ 公共施設の被害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所、病院等の重要公共施設の破損、倒壊 <p>④ 学校教育・社会教育・文化施設の被害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校園の約85%が被災 ・博物館、中央図書館旧館、ポートアイランドスポーツセンター等の破損、倒壊 ・酒蔵、異人館等の破損、倒壊 <p>(2) 都市機能の被害</p> <p>① 建築物、構造物の被害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全壊67,421棟、半壊55,145棟(H7.12.22現在) <p>② 火災による焼損(確定値)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全焼6,965棟、半焼80棟、部分焼270棟、ぼや71棟 ・延べ焼損面積819,108㎡ ・火災件数175件(震災とほぼ同時に54件発生) <p>③ 交通ネットワークの寸断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阪神高速道路3号神戸線、同5号湾岸線等の倒壊 ・陥没、高架構造物の落下、建築物倒壊等による道路不通 ・鉄道の寸断 ・海上都市へのアクセスの寸断 <p>④ 港湾施設等の被害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンテナバース、岸壁等がほとんど全て使用不能 ・港湾幹線道路の寸断 <p>⑤ 埋立地の液状化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東部2～4工区、ポートアイランド等で液状化 <p>⑥ ライフラインの寸断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電気 市内全域停止 (応急復旧に要した期間 7日間) ・電話 約25%停止 (応急復旧に要した期間 15日間) ・水道 市内ほぼ全域停止 (応急復旧に要した期間 91日間) ・工業用水道 市内全域停止 (応急復旧に要した期間 84日間) ・ガス 約80%停止 (応急復旧に要した期間 85日間) ・下水道 管渠・ポンプ場破損、処理場の機能低下(2/7箇所)及び機能停止(1/7箇所) (応急復旧に要した期間 135日間) ・クリーンセンター 全クリーンセンターの運転停止 (応急復旧に要した期間 35日間) 	<p>⑦ 公園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1/3の公園が擁壁崩壊、舗装陥没、地割れ等の被害 <p>⑧ 河川</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二級河川 117箇所破損 ・準用・普通河川 27箇所破損 <p>⑨ 治山・砂防</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緊急復旧を要する箇所 68箇所 <p>⑩ 社会・産業面の資本ストック全体の損害額(推計値)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約6兆9千億円 <p>(3) 神戸産業の被害</p> <p>① 基幹事業所及び製造大手企業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本社等中枢建築物の倒壊 ・生産ラインの停止 <p>② 中小企業・地場産業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケミカルシューズ 約80%が全半壊または全半焼 ・清酒造 50%以上の企業が全半壊 <p>③ 市場・商店街</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧市街地の商店街の約1/3、市場の約半数が甚大な被害 <p>④ 観光・コンベンション施設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光施設、宿泊施設、コンベンション施設などで建物損壊などの被害 <p>⑤ 農漁業施設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁港、漁船だまり、農地、農業用施設等が多数被害 <p>(4) その他</p> <p>上記の直接的被害にとどまらず、避難所生活に伴う精神的疲労や子ども・高齢者・障害者等への心理的影響、学校等教育機能の低下、ライフラインの復旧の遅れや交通渋滞などによる都市機能の低下、雇用の不安定化など、市民の生活に対して様々な面で、震災が影響を及ぼすこととなった。</p> <p>また、産業面においても、企業の市外への移転や被災による生産量の低下、港湾施設の被害に伴うコンテナ貨物の他港へのシフト、高速道路の寸断や復旧工事による交通容量の不足等により、神戸のみならず、日本経済へ深刻な影響を及ぼすこととなった。</p> <p>さらに、大量の災害廃棄物処理や、これに伴う環境への影響など、震災がもたらした被害は、広範囲で多方面にわたる深刻なものとなった。</p> <p>(5) 旧避難所等・仮設住宅・災害廃棄物処理について</p> <p>① 旧避難所</p> <p>避難所は平成7年8月20日で終了し、待機所を平成9年3月31日まで運営。</p> <p>② 仮設住宅</p> <ul style="list-style-type: none"> ○建設戸数 32,346戸 (市内29,178戸、市外3,168戸) ○撤去状況 全敷地原状復旧済。 <p>③ 災害廃棄物処理(平成10年3月末最終)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○実績 解体済 61,392棟(100%)
---	--

～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

「子どもたちへのメッセージ運動」の取り組みをご紹介します

子どもたちに命の尊さと震災の教訓を語り継ぐため、平成16年4月に運動を始めました。
平成21年度までに1,561通のメッセージが、寄せられました。

2月～翌年1月
メッセージを募集



1月中旬～下旬
メッセージ運動展
(市民ギャラリーにて)



9月～翌年1月
子どもたちに届けます



発行：平成22年10月

発行者：神戸市・神戸市教育委員会

編集：神戸市保健福祉局総務部人権推進課 電話 078-322-5234

協力：神戸市教育委員会指導部人権教育課 電話 078-322-5807

〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号

広報印刷物登録平成22年度第183号 A-1